
SHUFFLE！！ ～笑顔を忘れた貴方へ～

ポテト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SHUFFLE!! 　　＼笑顔を忘れた貴方へ＼

【Nコード】

N72790

【作者名】

ポテト

【あらすじ】

稟と楓の仲が、元に戻っていない状態で迎えた高校二年。

自分を押し殺し続けて笑顔を忘れた稟は、昔一緒に遊んだシアとネリネに出逢う。

く笑顔を忘れた貴方へく（前書き）

始めまして、ポテトと言います。

今更SHUFFLEですが、前に瀬戸と言う名前で、投稿していたサイトが稼動いてないので改めてここで投稿することにしました。

まあ、見る人は居ないだろうけど、小説処女作の初心者なんで練習用に投稿します（^ー^；）

初心者なんで文法や誤字脱字が多いと思いますが、これから鍛えて行くので

感想や、アドバイス、があれば是非是非下さい。（<ー>）

よろしく願いますm（ー）m

く笑顔を忘れた貴方へく

いつからだろう・・・

俺が笑い方を忘れたのは・・・

いつからだろう・・・

俺が泣き方を忘れたのは・・・

いつからなんだろうな・・・

俺が・・・土見稟が・・・

俺自身の・・・形を忘れ始めたのは・・・

小学生の頃か・・・？いや・・・中学生の頃か？

・・・はは、わかんねーや。

今の俺が・・・俺自身を段々と忘れても・・・！

・・・楓が生きていてくれるなら・・・

笑っていられるなら・・・俺は自分を忘れたって構わない。

大事な人だから・・・！どんな事にも何にだって耐えてやる！

「くたばれや！！土見！！」
バキッ！！

体育館裏に響く鈍い音。

「グ・・・！ゲホゴホ！」

腹を押さえ地面に横たわる稟

制裁と言う名の集団リンチ・・・凛一人に対して数十人・・・

「さっさと死ねよ！死ねって！おい！」

ドカッ！

「ガッ！」

「お前の存在が楓ちゃんを苦しめてんだよ！」
「バキッ！！」

「グフ！！」

稟の身体はボロボロで、倒れているのに容赦なく降り注ぐ暴力の雨
普通の人間ならば立てないはずの傷

いや・・・普通の人間ならここまでボコボコにされれば“絶対に
立たない”でも

・・・それでも稟は、膝が笑ってフラフラしながらも、立ち上がり、
自分を取り囲む人間を睨みつけた

何度も何度も、地面に倒れては起き上がり、暴力の雨を全身で受
け止める稟

「クソ！相変わらずキモイんだよコイツわよ！！」

「さすが『壊れた人形』だよな、普通じゃないぜ！」

“壊れた人形” 殴っても殴っても表情を変えず、起き上がってく
る稟に付けられた二つ名

「いいか『壊れた人形』！お前の存在は、楓ちゃんにとって邪魔な
んだよ！」

「楓ちゃんの家からさっさと出て行けよな人殺し！」

「つゝか早く死ね！」

殴り疲れたのか男達はそう言い残すと去って行った

「・・・壊れた・・・人形・・・か・・・」

ドサッ

稟は悲しそうにそれだけ呟くと、意識を無くし倒れた

「僕が楓のお母さんを殺したんだ」

「それ・・・ほんと・・・？」

「うん・・・」

「りんくんなんか・・・りんなんか死んじやえばいいんだ!」

幼い頃の夢・・・何度も何度も見ている夢・・・

無力な自分の夢・・・こんな嘘でしか、楓に生きる目的を与えて
やれなかった馬鹿な自分・・・

でも後悔はしていない楓が生きいてくれるなら・・・

稟と楓

「ただいま。」

楓は小さくそう言うと、誰も居ない家の玄関を開けた。

・・・あの人はまだ帰って来てないんだ・・・。

玄関に稟の靴が無いのを確認すると、家の中に入って行った。

私には・・・何があっても許せない・・・
憎い相手がいる・・・。

数年前・・・。

私は・・・、大好きだったお母さんを失った・・・。

私の大好きだったお母さんを殺したのが土見稟！！

私のお母さんを殺していながら！

私のお父さんから！

私たち家族から！

お母さんを奪っていないながら！！

あの人は！！

私の家で！！

この芙蓉家で！！！！

今も！！・・・のうのうと生きて続けている！！

私は・・・あの人が憎い！！

・・・でも・・・。

何でだろう・・・。

最近のあの人の顔を見ると胸が苦しくなる・・・。

昔の・・・あの人はあんなに無表情じゃなかった・・・。

あの人が不幸になる事は・・・

私が望んでいる事なのに何で・・・？
何で・・・

あの人の顔を見ると、泣きたくなるのだろうか・・・。

心が・・・苦しい・・・。

あの人の存在が私を苦しめる・・・。

早くあの人が死んでしまえば・・・。

私は・・・苦しまなくて済むのに・・・。

あの人が死ぬば！

私は・・・私は・・・！！

「あ・・・れ・・・？」

目を覚ますと保健室だった。

「あつ！土見君が起きたのですよ」

声のした方に視線を向けると。

左右の瞳の色が違う少女が、稟を心配そうな表情で見つめていた。

「麻弓・・・？何で・・・？」

「KKKの人間が、大勢で体育館裏から出て来たら、誰だって分かるですよ」

「今回は・・・いつもより酷い怪我なのですよ・・・」
本当に心配してくれているんだろう、いつもの元気がなかった。

「すま・・・ない・・・」

ガラガラ

「気が付いたみたいだね稟、今回はいつもよりボコボコにやられたな」

部屋に入ってきた樹は、稟が起きているのを見ると、口元に笑みを浮かべて。

「とりあえず怪我の手当てはしたが、一応病院に行った方がいいぞ・・・。」

「有り難う、そうするよ・・・」

稟はそれだけ言つとベッドから降りて。

ボロボロの身体を引きずり、部屋の扉に手を掛けた。

「なあ稟・・・一つだけ聞いてもいいかい？」

「・・・何だ？」

稟は後ろを振り向かず、声だけでそう返し。

「稟・・・君はいつまでこんな事を続けるつもりなんだい？」

樹の言葉に、稟の心臓は一瞬止まった。

「こんな事・・・何の事だ？」

稟は動揺する心を抑えつけ、平静を装って答えた。

「楓ちゃんの事だよ」

樹のその一言で、稟の平常心は簡単に碎け散った・・・。

思考は上手くまとまらず、普段は無表情な顔に冷や汗が伝っている。

「彼女は君を憎んでいる・・・、それはバーベナの生徒なら誰だつて知っている事だ・・・」

樹は動揺している稟の心など、知ってか知らずか。

背を向けたままの稟に言葉を続けた。

「君が彼女の母親を殺したから．．．だよな？」

「．．．ああ．．．」

の問いかけに稟は小さく頷く。

「それで．．．君はその罪を背負い、楓ちゃんやKKKから降り注ぐ暴力や罵声、全ての仕打ちにただ耐えている」

「仕方ない．．．、全部俺が悪いんだから」

そう．．．俺が悪い．．．。

楓に嘘をつき、見せかけの生きる目的を与えている、俺の．．．罪．．．。

真実を知る事を先延ばしにし．．．。

時間が経てば経つほど．．．楓が苦しむって分かっているがら．．．。

それでも．．．嘘で嘘を塗り固め続けている俺．．．。

ただ楓に生きていて欲しい、そんな．．．『自己満足と言う名の罪』．．．。

だから、楓に絶対にバレないように。

この嘘で発生するあらゆる事を俺は背負わなければならぬ．．．。

。。

「俺様は・・・その事に納得出来ないんだよ・・・」

「え・・・？」

稟は樹が何を言ったのか理解できず、間抜けな返事を返した。

だが・・・樹はそんな返事など聞こえなかったかの様に話し続け。

「納得出来ない理由その一、楓ちゃんの母親が死んだ時に、君の両親も一緒に死んでいると言う事だ」

「君の両親も死んだという事は、事故の可能性が高い、事故なら何故君が楓ちゃんの母親を殺したと言う事になるんだ？」

今までKKKの連中や周りの生徒達は

楓の母親や稟の両親が死んだ理由にまで考えが回らなかった。

KKKの連中は楓と一緒に暮らしている、稟を叩く理由のために深く考えず。

他の生徒は、楓の辛い過去の話だから、聞く事ができず。

暗黙の内に稟が、楓の母親を殺した・・・と言う事になっていた・・・。

でも・・・誰もが考えず、聞けずにいた事を樹は言葉にした。

「それは！！旅行中の三人を俺が無理矢理呼び戻したから！！！！」

珍しく、本当に珍しく声を荒げて樹の言葉を否定する稟。

でも樹はそんな稟を気にもせずにあくまで冷静に続けた。

「呼び戻した理由は？君は、理由もなく旅行を楽しんでいる人を呼び戻したりしない、違うかい？」

今まで誰も気が付かなかった矛盾点……。

でも……その矛盾点に樹は気が付いている。

麻弓と樹（前書き）

あれ？樹が樹らしくないかも（。□。；）
原作よりかっこいい（。|。）

麻弓と樹

「・・・それは・・・」

稟は・・・

樹の問掛けに口を濁しただけで、答える事ができなかった・・・。

「・・・答えられないか・・・」

「稟・・・、俺様と初めて出会った時の事を覚えているかい？」

「？ああ・・・覚えてるけどそれが・・・？」

「あの時、君は見たこともない麻弓の為に、知らない人間を三人も殴り倒した・・・」

「えっ！？それ・・・本当なのですか！？」

今まで黙って、樹と稟のやり取りを聞いていた麻弓だったが、驚愕の事実には驚きの声を上げる。

「麻弓、サル・ブタ・カツパの三人の事は覚えているだろう？」

「覚えているけど・・・それが・・・？」

樹は薄く笑みを浮かべると話し始めた。

「俺様がなバーベナの下見に行った時に、木漏れ日通りで、偶然あのサナダムシ共と出会ってな・・・」

「それで・・・いつも通り喧嘩をふっかけられて、三人が君を馬鹿にしたんだよ・・・、君を泣かすって言ってな・・・。」

「そしたら何処の誰か分からない奴が、三人を殴り倒したんだ・・・、それが稟だった」

「えっと、土見君は何でその三人を殴り倒したの？」

麻弓は驚きで目を丸くしている。

「自分にも幼馴染みがいるから、あの三人が言った言葉を自分達に重ねたら、あの三人が言った事が許せなかったかららしい」

「そんな理由で・・・。」

麻弓は・・・照れたらしく真っ赤になった顔を、隠すようにうつ向いた。

そんな麻弓を、樹は微笑みながら見ている・・・。

樹はメガネを指で押し上げ稟の方を向くと、更に話し始めた。

「稟・・・君は中傷された麻弓の為にあの三人を殴った・・・。」

「いや違うな・・・、あの三人が言った言葉を自分に重ねたんだから・・・。」

「君は・・・、楓ちゃんの為にあの三人を殴った・・・。」

「あの日、君と出会ってからずっと、君を見てきたが・・・、君は楓ちゃんの為に行動している・・・」

「・・・」

稟は樹の問掛けに、返事を返す事ができずに、ただ・・・黙って樹の話聞く事しかできない。

「稟・・・、君が自覚しているか、していないかは分からないが・・・」

「楓ちゃんがクラスの誰かと笑い合っていると、君は嬉しそうにしているんだよ・・・」

稟は笑う事ができなくなっている、

それなのに、クラスで楓が誰かと笑い合っているのを見ると、嬉しそうに見つめている。

「理由はどうあれ、今まで・・・、辛い仕打ちをしてきた人間の笑っている顔を見て、嬉しそうになんてできるかい・・・？」

「普通の人間が・・・、稟と同じ立場なら嬉しそうになんてできない筈だ・・・」

「いや、逆に憎しみすら抱いたっておかしくない・・・」

「でも君は違う・・・、ならそこには訳がある筈だ・・・、違うかい？」

稟は樹の言葉に何も言えず、唇を噛み締めて黙って聞いている・・・

。

樹は溜め息を吐き、扉の方を向いたままの、稟の肩を掴むと自分の方に向けさせて。

「なあ稟・・・、彼女でも作ってみたらどうだい？」

凄く真剣な顔でそう言ってきた。

「えっ！？」

稟は樹が何を言ったのか理解できず、間抜けな返事をした。

でも樹はそんな返事など聞こえなかったかの様に話し続け。

「俺様は君に出会って変わった、だから次は君が変わる番だ・・・」

「麻弓なんかどうだい？ナイチチだけど、顔だけはモデル並だからお買い得だぞ」

ニヤリと笑う樹。

「緑葉君♪ ナイチチは余計なのですよ♪」

麻弓は満面の笑みを浮かべながら、何処から出したのかロープを手をしている。

「珍しく真面目になっていたと思ったら・・・」

「とりあえず♪ エビフライになるのですよ♪」

「ちょ！麻弓ストップ！！俺様は縛るのは好きだけど縛られるのは！！」

樹はロープを手にした麻弓を見てうろたえる。

「大丈夫♪緑葉君ならすぐに縛らるのも快感に変わるから♪」
シュッ！！

麻弓は一瞬で樹を縛りあげて。

「ああ！これはこれで・・・！」

縛られた樹は恍惚の声をあげる。

真面目な話から一転一気に、場の雰囲気はカオスと化した。

「それに・・・、この胸はこれで貴重なんだから、平均より小さいってことは、それだけ数も少ないってことだし」

「全体の比率で考えれば、むしろ売り手市場なのよ。」

「それに、彼氏になれば、この胸を1から自分好みの大きさに育て上げることできるのよ！」

麻弓は無い胸を張って見せる。

「だってさ稟、どうする？」

樹は縛られたまま稟に問掛け。

「いや、俺はいい・・・」

「土見君それは酷いんじゃない・・・、少くくらは迷ってくれたって・・・」

稟の返事に、麻弓は拗ねてうつ向いてしまった。

「?」

鈍感な稟は、そんな麻弓の態度に首を傾げ、樹は分かっているらしく笑っている。

「俺には・・・、誰かを好きになる資格なんかないし、好きになってもらう資格もない・・・」

「俺と一緒にいたら不幸になる、だから・・・誰とも付き合えないよ・・・」

稟は自嘲気味に微笑むと、樹達に背を向けて部屋から出て行った・・・。

「土見君・・・、そんなの悲し過ぎるよ・・・、私はあなたが・・・」

麻弓は稟が出て行った扉を見つめながら、悲しく呟いた。

神族の少女と魔族の少女（前書き）

はい、グダグダです（TOT）

うん、私の小説の稟は中二病を患ってますねorz
末期ですねワカリマス（へ）
というか私が末期ですね。（、、）o

神族の少女と魔族の少女

「彼女・・・か・・・」

樹達の気持ちは嬉しいけど、俺には彼女を作る資格なんかないよ・・・。

まあそれより・・・今日の晩飯をどうするかだよな。

稟は学校を出た後、病院に行き傷の手当を受けて、今は商店街を晩飯を求めて歩いている。

「とりあえず、いつもの店に行くか」

稟は、今日の晩飯を何にするか考えながら、足を商店街の奥へと向けた。

時間のせいかなそれほど混んでもいないスーパーの店内を、色々と歩いて回る。

えーと・・・、昨日がハンバーグ弁当だったから、今日は和食か中華系で・・・。

惣菜のコロッケもいいな・・・、そうだな今日は幕の内と惣菜で決まりだな。

稟は、幕の内弁当の入ったカゴを手にしたまま、奥の精肉コーナー横の惣菜売り場へと向かって行った。

「コロッケ・・・と、コロッケの他は何を・・・」

「うーん・・・グラム換算するとこっちのが安いけど、全体で見るとこっちのが安いんだよねえ」

「お父さんよく食べるし・・・だったらやっぱりこっちの方がなあ、珍しいな・・・、神族の女の子がこんな所で、商品を見つめながら悩んでる姿なんて。」

「？」

不意に少女が振り向いて、稟と目が合ってしまう。

「ねえねえ、稟くんはどっちがいいと思う？」

少女は顔に、満面の笑みを浮かべた。

「はっ・・・？」

「一応この二つのどっちか、までは決めたんだけどね。」

「お父さんよく食べるから、こっちのパックを二つでいくか、それともこっちの大きなパック一つでいくか、悩み所なのよ」

「ねえ、稟くんはどっちがいいと思う？」

「パック二つの方が量多いから、パック二つの方を・・・」

「やっぱり？じゃあパック二つの方でいっちゃおーっと」

少女はニコニコと笑いながら、稟が言ったパック二つをカゴの中に入れていく。

「ありがとね稟くん、これでタイムサービスに間に合うよ。」

「いや・・・。」

「あれ？稟くんそのお弁当は？」

少女は稟が持っている弁当の入ったカゴを見ている。

「これか？晩飯だけど・・・。」

「えっ？稟くんの晩御飯なの？」

驚きに眼を見開く少女。

「うん？ああ、俺はいつも弁当だからな・・・。」

「いつもって、毎日スーパーのお弁当なの？」

「そうだけど・・・？。」

「毎日スーパーのお弁当って身体に悪いよ？」

初対面なのにこちらを気遣ってくれる少女、彼女は優しい娘なのだろう。

「そうなんだけどな・・・、まあ仕方ない食わない訳にはいかないし」

「そうだけど・・・」

少女は稟の回答を聞いて、何事か悩み出した。

『今日稟くんを私の家に晩御飯に誘うとか・・・？あゝでもお父さん達がなあ』

稟の回答を聞いた少女は、ブツブツと何かを呟きながら悩んでいる。

「・・・なあいいのか？」

「えっ？」

「タイムサービスがあるんだろ・・・」

慌てて少女は時間を確認して・・・。

「あー！！はあ・・・せつかく稟くんに出会えたのになあ・・・」

「ごめんね稟くん」

「いや・・・たいしたことはしてないから、気にしないでいい・・・」

「ありがとう稟くん、それじゃあ、またね稟くん」

少女は深くお辞儀をすると笑顔を浮かべて、風のように走って行っ

た。

稟も自分の買う商品を手にして、レジに向かう。

紅く染まった街を稟は当てもなくトボトボと歩く。

片手にはさっきのスーパーで買った弁当が入ったビニール袋を持っている。

「まだ帰るには少し早いよな……」

いつもの所に行くか……

昔よく遊んだ場所、住宅地の中にポツンとある小さく狭い公園、ブランコと砂場が一つずつあるだけの簡素な公園。

昔はみんなが使っていた公園だけど、住宅地の端の方に噴水まである広い公園が作られて、誰も小さな公園を使わなくなった。

でも稟は毎日この簡素な公園に来ていた。

昔まだ楓と仲が良かった頃の、桜と楓で遊んだ思い出が詰まっている公園。

稟は一人、昔の事を思い出しながら、幼かった頃のように夕日に染まる公園を毎日眺めている。

公園に向かうために、家とは逆方向の角を曲がると、突然に歌が聞こえてきた。

優しいような悲しいような、そんなガラス細工のような旋律……。

美しい声。

何故か惹かれる曲。

周りから疎まれていて、俺という存在を繋ぎとめるような、そんな不思議な歌。

そんな歌が稟が目指していた公園の中から聞こえてくる。

中には魔族の少女がブランコに座って歌っていた……。

稟は目を瞑り、歌に耳を澄ませる。

悲しげな旋律なのに、優しく包み込むような不思議な感覚。

「あ……。」

少女の驚きの声。

目を開けば少女が恥ずかしげに稟は見ている。

「驚かしてすまない……。」

稟は歌を邪魔してしまった少女に、頭を下げて謝った。

「いえ……、気にしないで下さい」

驚いていた少女は稟の態度を見ると、すぐに微笑んで見せる。

「歌・・・上手いんだな・・・」

「そんな事ないですよ、私より上手い方はもっと大勢いますから」

聴かれたのが恥ずかしいのか頬を赤くする少女。

「いや・・・上手いと思う、でも君は悲しげに歌うんだな・・・」

「えっ！悲しげ・・・ですか？」

少女は驚きの声をあげる・・・。

「いや・・・すまない・・・、俺がそう感じたただだから気にしないでくれ。」

「そっ・・・そうですか・・・？」

首を傾げながらも少女は頷いた。

「でも、誰もいないと思っていたので、少し恥ずかしです・・・」

少女は、赤くなった頬に手をそえてうつ向ってしまう。

「すまないな、邪魔をするつもりはなかったんだ。」

「いえ、邪魔なんて事ありませんよ、ただ恥ずかしかったただけですから。」

「……君の歌さ、俺は好きだ……、なんだか……」

（なんだか、俺みたいなの、人間を許してくれたような……そんな歌……）

「そうですか、ありがとうございます稟さま。」

稟の答えに、少女は嬉しそうに微笑んでくれる。

「すみません、そろそろ戻らないといけないので、失礼させていただきます」

静かにブランコから降りた少女は、残念そうに告げた。

「ああ、すまない……邪魔してしまって……」

「いえ、少しでもお話出来て嬉しかったですから」

少女の顔に笑顔が浮かぶ。

「それでは、またお会い出来るときを楽しみにしていますね、稟さま」

「ああ……」

少女は笑顔を崩すことなく、公園から出ていった。

稟は、その少女が見えなくなると、ブランコに腰掛ける。

「・・・今日は珍しく人と話しをした日だったな・・・」

神族の子といいさっきの魔族の子といい・・・。

・・・あれ？

・・・俺・・・名前言っただか？

何で俺の名前を・・・？

少女が去った方を見たが、もちろん姿はすでない・・・。

「・・・同じ学園の生徒か・・・？」

だとしたら、俺に話しかけることなんてまずありえない。

「・・・知り合いなら・・・また会うかもしれないか・・・」

分からないことは悩んでも仕方ない・・・

稟は、考えるのを止めて、持っていた袋から弁当を取り出し、食べ始めた。

――
――
――

稟が公園を後にしたのは、夜の１１時を過ぎてからだった。

稟は何も考えず公園でボーと空を眺めて時間を潰す・・・

おじさんの帰りは遅いから、楓と時間が合わないように調整して帰る、それが稟の日課になっている。

芙蓉家に着いた稟は玄関を開けようとしたが、鍵が掛っていたため入れなかった。

「・・・仕方ない・・・あそこから入るか・・・」

稟はそう呟き、雨樋と壁に手を掛けて、地面を蹴った。

一階の窓の上にある小さな屋根に足を乗せると、背伸びをして二階のベランダの縁を掴み、一気に身体を引き上げる。

そして、自分の部屋の鍵をしていない窓を、ベランダから足を伸ばして開けると、屋根を掴み懸垂の要領で窓まで渡った。

「・・・ふう」

・・・何とか渡れたな・・・。

「さすがに疲れた・・・な・・・もう・・・寝よう・・・」

稟はそのまま着替えもせずベッドに横たわった。

楓と麻弓と詩織（前書き）

グダグダ（。□。；）

楓と麻弓と詩織

夢……。

「花火……綺麗だね。りんくん」

「うん……。綺麗だね楓」

幼い頃の夢……。

「花火は見てるのもいいけど、やった方が近くで見れるから綺麗に見えるし」

「それに……。楽しいだろ楓」

まだあの人と仲がよかった頃の夢……。

「うん♪今までは怖くてできなかったけど、りんくんのおかげで、もう大丈夫だよ」

幼い頃の私は彼の言葉に頷き笑顔を見せた。

「これで、最後なんだね……」

「うん……。楓の持ってるのが最後の一本だよ」

たくさんあった花火も、私が持っている一本でおしまい。

線香花火の寂しい感じの光が、パチパチと弾けて、少しずつ小さく

なっていく。

「綺麗だけど・・・、これで終わりなのは寂しいね・・・」

線香花火の光は寂しげに弱まっていき、ついに先が地面に落ちてしまった。

「あっ・・・！終わっちゃった・・・」

私は線香花火の先が消えた地面を、じっと寂しげに見ている。

「今回の花火は終わっちゃったけどさ、またやればいいよ」

「また、今日みたいにさ。ずっと一緒にやっていけば、何回でもやり直せば、終わっちゃっても寂しくないよ」

「りんくん、また・・・一緒にやってくる？」

私は彼の言葉に顔を上げ、彼を不安げに見つめた。

「うん！また一緒にやろう何回でも、二人でやり直せばいいよ」

彼はそう言つと私の頭を撫でてくれた。

「りんくん、わたしとずっと一緒にいてくれる・・・？」

私は彼の言葉に期待して、彼の目を見る。

「うん！どこにも行かない。ずっと一緒にいるよ。」

彼は私の問いに、私の好きな笑顔で、迷いなく答えてくれた。

「わたしもどこにも行かないっ。りんくんとずっと一緒だよ!」

私は彼の言葉が嬉しくて、顔が熱くなったけど、私も迷わずに言い切った。

私のその言葉に、彼は見たことないくらいの笑顔を浮かべてくれた。

「そうだ!約束しようよ楓!」

「約束?」

「そう!約束!二人がずっと一緒だって約束」

差し出される左手の小指に。

「う・・・うん!約束だよりんくん!」

「うん!約束!」

私も小指を返し、彼の指に私の指を絡ませて。

「ずっと一緒にいようね、りんくん」

「うん。ずっと一緒にいるよ」

私と彼はその指を切った。

私たちは、ずっと一緒・・・。

そんな約束を交わした、幼いあの時の夢・・・・・・・・。

「朝・・・」

私はいつもの時間に目覚め、普段通りの朝を迎えたつもりだった。

「あれ？なんで・・・？」

でも・・・、今日はいつもと違って。

私の目から・・・、涙が流れていた・・・・・・・・。

とても・・・懐かしい夢を見た気がする・・・・・・・・。

不安もなく、毎日が楽しくて、毎日が幸せだった頃の、あの人の事が好きだった頃の夢を・・・・・・・・。

あの人との夢を見るのは不快な筈なのに・・・・・・・・。

「グスッ、うっう・・・・・・・・」

「ヒック！なんで・・・、なんで涙が止らないの・・・・・・・・、うっ・・・・・・・・」

私の目からは、涙が止らなくて・・・。

チクチクと痛む胸を押さえ、私は涙を流し続けた・・・・・・・・。

「おはよう楓ちゃん」

「おはよう楓」

「おはようございます」

クラスに入ると、先に来ていた友達が、入った来た私に気付き、挨拶をしてくれ。

私は、友達からの挨拶に、返事を返しながら自分の席に座る。

「おはよう、楓、今日はいつもよりも遅かったね？どうしたの？」

隣の席の紗織が、私の席に近付いてきて、机に腰を掛けた。

「おはようございます、紗織ちゃん、今日はちょっと寝坊してしまつて・・・」

今朝の、涙がどうしても止らなくて、涙が枯れた頃には、いつもの時間よりも、だいぶ遅い時間だった。

「珍しいわね楓が寝坊なんて？」

「そつ、そうでしょうか？」

「うん、何かあった？少し目が腫れてるけど？」

「あ！もしかして・・・、あいつが」

「そ！それより紗織ちゃん、なんで今日はクラスに男子が居ないの？」

私は、紗織ちゃんが言おうとした事に気付き、あの人の話が出る前に、話を逸らし、先程から気になっていた事を聞いた。

「ああ・・・、それね・・・」

何故か紗織はすうっと大きく息を吸い込み。

「それは！お「女の子の転校生が二人私達のクラスに転校してくるからなのですよー！！！！」」

「ああ！私の・・・台詞が・・・」

紗織が話そとしていた所を、紗織の後ろから現われた人物が、紗織の台詞をパクった。

紗織は、台詞を取られたショックで、机からズリ落ちて、床に膝を着き落ち込んでいる。

「おはようございます、麻弓ちゃん」

「おはよう楓！ってか紗織は何をやっているの？」

紗織は麻弓に台詞をパクられたから、床に膝を着いて落ち込んでいるのに、麻弓はその事に気付いていなかった。

「グスッ、ううう・・・、麻弓のバカゝ!!」

「ちよっ! 紗織!？」

紗織は、泣きながら教室を飛び出して行った。

「いったい何が・・・？」

「は・・・はは・・・」

麻弓は、紗織が飛び出した方を呆然と見つめ。

楓はそんな二人を見て苦笑いを浮かべている。

「でも、こんな時期に転校生なんて、珍しいですね」

もうすぐしたら、一学期も終わりになる、こんな時期の転校は珍しい。

「確かに珍しいわね、何か訳ありみたいなのですよ」

「今朝早くから、なっちゃん達、教師が、慌ただしくしてたのですよ」

「訳あり・・・ですか・・・？」

私はその訳を考えていると、教室の扉が開き、一人の男子が入って来た。

「あ・・・」

教室に入ってきた、あの人と目が合う。

だけど、あの人は無表情なまま目線を逸らし、自分の席に着いた。

まるで……、私の存在など眼中にないような態度で……。

「っと！ごめん楓！話しはまた後で」

「えっ？」

麻弓ちゃんはそう言うと、あの人の方へ行ってしまった。

土見君は無表情なままだけど、しっかり挨拶を返してくれる。

「土見君は職員室に行かなかったんだ」

「?・・・何でだ?」

「今日このクラスに、女の子の転校生が二人来るのですよ」

「転校生が二人・・・?」

もしかして・・・、昨日の神族と魔族の子か?

「どうしたの?土見君?」

「いや・・・何でもない・・・」

稟は頭を振り、考えるのを止めた。

「・・・ああ、だから樹はいないのか・・・」

「そう緑葉君は職員室、って言うか・・・男子全員職員室に行ってるのですよ」

麻弓の言う通りに、教室の中を見回すと、稟一人しか男子がいなかった。

「本当だ・・・」

土見君もさすがに、男子全員が職員室に行っているのには呆れたみ

たいね。

ガララ！

勢いよく扉が開き、職員室に行っていた、樹を含む男子連中がドカドカと入ってくる。

「?どうしたの緑葉君変な顔して?」

苦勞人紅女史と神王と魔王（前書き）

昨日編集集中に爆睡で、投稿遅れた（ノ　丁）

苦勞人紅女史と神王と魔王

「いやあ、なんていうか・・・世界って広いな」

「彼女達のような、超極上の女性がまだ居たとは」

「さすがの稟でも、彼女達の笑顔を見れば、絶対に驚くよ」

樹は、極楽を体験したような、実に嬉しそうな表情だ。

普段から自信満々な樹だけど、今日はいつも以上の自信満々な態度で言い切った。

「ふっ・・・、まさか俺様がこんなにも、歡喜にうち震える事になるなんて・・・」

「稟も見に来ればよかったのに」

樹は、まるで先程までの映像を、天井に映し出しているかのように、凄く嬉しそうな恍惚とした顔をしながら天井を見上げている。

教室の中を見渡すと、樹だけではなく、男子全員が樹と同じように天井を見上げ、恍惚とした顔をしていた。

そんな男子に、クラスの女子は、引き気味になっていて、男子から少し距離を取っている。

「まあ、確かに凄く綺麗だったから、男子が浮かれる気持ちは分かるですよ」

「……そうなのか？」

「うん、同性でも懂れるくらいなのですよ」

「デジカメに写真撮ってあるけど、土見君見てみる？」

「いや……、俺は「よし、ホームルーム始めるぞー」

俺の言葉を遮るように、扉が勢いよく開かれて、紅女史が出席簿を片手に入ってくる。

「こら男子、気持ちは分かんなくてもないけど、早く座れ！」

「おっす！」

紅女史の言葉に、ボーっと天井を見上げていた男子達が、我先にと自分の席に戻っていった。

教壇に立った紅女史に、男子生徒からの、まだかまだかという視線が集まる。

「あー、説明するだけムダだな。」

紅女史は、そんな男子を一瞥して、諦めたように溜め息を吐いた。

「二人とも、入ってきなさい」

紅女史の言葉を聞いて、男子の間から歓声が巻き起こる。

そんな歓声の中、ドアがゆっくりと開き二人が姿を見せた。

「あつはっはっはっ！！なんか面白そうなところじゃねーか、この学校は！」

「うん、まったくだ。若く美しいお嬢さん方がいっぱいいて若返った気がするよ」

歓声も、拍手も、はしゃいでいた男子達も、すべてが鳴り止み、教室を静寂が支配した。

教室に入ってきたのは、綺麗な女の子ではなく。

和服を着ている筋肉質な神族の大男。

そして、どこか危険さを感じさせる、細身な色男の魔族だった。

「で、まー坊どの坊主がそうだった？」

二人は、静まり返る教室を全く気にもせず、キョロキョロと誰かを探し始めた。

「えっと……、ああ、いたいた発見」

「どれどれ……ほお……、あいつか。なるほどな」

そして、二人は窓の外をボクと眺めている稟に、近付いて来て。

「やあ稟ちゃん、久しぶりだね」

「え？」

稟が窓の外から視線を戻すと、満面の笑みを浮かべた二人の顔が目の前にあった。

「キミは、昔よりも更にいい男性になったようだ」

「ネリネちゃんのこと、よろしく頼んだよ」

魔族の男は、困惑している稟の手を掴み、強引に握手をして。

「おいおいおい！ 抜け駆けはなしだぜ、まー坊！」

「見たところ中々の身体つきのようなしな、さすが、シアが選んだだけのことはあるぜ、シアのことよろしく頼むぜ稟殿！」

神族の男は、見ために違わぬ力で、バンバンと稟の肩を叩いた。

困惑している稟を置き去りにして、二人は勝つてに盛り上がっている。

「あの・・・、貴方達は？」

「お父さん！！」

バキ！！

不意に目の前の神族の顔が横にズれた。

「シア、さすがに椅子はやりすぎだと教えただろうが・・・」

「お父さんには、これくらいが丁度いいんです」

神族の男の後から、同じく神族の少女が姿を見せる。

「あ……」

昨日スーパーで出会った少女だった、その両手にしっかりと握り締めた椅子で、神族の男をぶん殴ったようだ。

「お父様もやりすぎです、稟さまが驚いてらっしゃるじゃないですか」

そしてもう一人、魔族の男の後から公園で出会った少女が姿を見せる。

「いや、パパとしては稟ちゃんに挨拶をと思ってね」

「ですから、それは今夜にでも、ご挨拶に伺うことになっていたじゃないですか」

二人の少女の登場に、慌て始める二人の男。

「いやあ、神ちゃんがどうしても、今すぐに稟ちゃんに会って挨拶したいと言いついてね」

「おい！まー坊！俺一人のせいにするんじゃないぞ！おめえだって『うん、最初が肝心だからね、私も行こう』って喜々として付いてきたくせに！」

「二人とも同罪です!!」

「はい……」

娘の叱咤にシユンとなる二人、娘の方が強いらしい。

「いったい……、何なんだよ……」

そんな、稟の呟きは静まり返った教室に消えていった。

「リシアンサスです、神界からやって来ました、シアって呼んで下さい」

『うおおおー！シアちゃん！！！！』

「あのネリネと申します、魔界からやってまいりました、リンと呼んで下さい」

『うおおおー！リンちゃん！！！！』

むちゃくちゃに盛り上がる男子。

机の上に登る奴、踊り出す奴、涙を流す奴までいる。

そんな男子に、女子から凍えそうなくらいの、冷ややかな視線が送られる。

「ユーストマだ、シアの父親をやっている、まあ、ついでに神王も

やってるんでよろしくな」

挨拶ついでに、そのご立派な腕の筋肉を『ふん!』と見せて笑顔で挨拶する神王。

「私はフォーベシイ、ネリネちゃんの父親で、ついでに魔王でもある、是非見知っておいてくれたまえ」

口元を無駄に器用にキラ〜ンと光らせ、笑顔で挨拶する魔王。

無駄にインパクトのある二人である、挨拶をただで盛り上がっていたクラスは静まり返っている。

えっ？今何て？

「お二人は結構です・・・」

紅女史は、額に血管を浮かべながらも笑顔を崩さないでいた。

が、紅女史もさすがに朝からの大騒ぎで、辛いのか口元はヒクヒクと引きつっている。

「樹、今あの二人何て言っ・・・駄目か・・・」

「シアちゃんとネリネちゃんかぁ、彼氏とかいるのかな、まあ、いても俺様が奪い取るだけだね」

「俺様のハーレム計画にまた二人♪」

金髪ロングの妄想少女のように、自分の世界に入っただま帰って来

ない。

「その頃、

「まままあゝハーレム計画なんてゝ」

「ちょっと、カレハ！いきなりなんでスイッチ入っちゃうのよ！？」

「亜沙ちゃんはゝもうハーレム計画の一員にゝ」

「ハーレム計画って・・・、ちょっと！カレハゝ！」

「まままあゝ」

メーター振り切っている、癒やしと。

親友のトンデモ発言に、ある意味自分の二つ名通りに、驚愕しあたふたしている緑髪の少女。

そんな、料理部メンバーがいたのはまた別の話し。

「元に戻りまして、

「麻弓・・・」

麻弓は、わかっているというように頷いた。

「土見君、大丈夫、私にも聞こえたから」

俺達が、そんなやり取りをしていると。

クラス中の思いを受け取ったかのように、楓の右手が一直線に天へと伸びる。

「あの、撫子先生。今とても信じられない言葉を聞いたような・・・」

「神王と魔王って・・・」

楓の質問に、紅女史は、やっぱり来たかという顔をして。

「あゝ、まあ・・・そういうことだ・・・」

「非常に嘆かわし・・・じゃなくて、非常に残ね・・・でもなくて、非常に信じられないことだが」

「このお二方は、神王様と魔王様だ、そしてその娘さん・・・、言いたいことは分かるよな、緑葉！」

紅女史は、笑顔で樹に問い掛ける。

「もちろん、俺様が必ず幸せにします」

「お前は近付くなと言っている!!」

樹の返事に、紅女史の視線は殺気に満ちていた。

「で、だ・・・」

紅女史は、不意に稟の方を向き。

「つつちー、この二人の面倒はお前に任せる」

疲れきった表情でそう宣告した。

「は？」

魔王と神王と親心（前書き）

更新おば（　　）

いやゝ、今回は落ちる前にちゃんと投稿です（＾Ｏ＾）

それと、アイさんシナリオが頭の中で完成したんだけど、少しネタが今の小説とかぶってる（。□。；）

とりあえず、この小説が終わるかある程度進んでから、投稿するかしないか考えてみます（＾―＾）v

アイさん好きだゝ！投稿してくれゝ！って人がいれば頑張って投稿しますが（。；ノ）ノ

ちなみに私はアイさんが大・好・き・だ！！！！

魔王と神王と親心

「つつちー、この二人の面倒はお前に任せる」

「は？」

クラス中の男子の視線が、驚愕と共に俺へと集まる。

「・・・超法規的処置によつてそう決まった」

心底疲れきつた顔で、深い深い溜め息吐きをつく紅女史。

「超・・・法規的処置・・・？」

「それは、私から説明しようじゃないか」

「稟ちゃんは、ネリネちゃんとシアちゃん、二人の婚約者候補に選ばれたわけなんだよ」

「は、はいっ!？」

凄く嬉しそうな顔で、凄くとんでもない言葉を口にする魔王様。

俺の元に集まっていた視線が、殺意と訝しげな視線へと変貌する。

「てな訳で、シアを選べば神界の権力使い放題だぜ」

「それなら、ネリネちゃんを選んでくれれば、魔界の権力使い放題

なんだからね」

両王の後で、嬉しそうに頬を染める二人の少女。

「ちょっと待って下さい！なんで俺が選ばれるんですか！」

珍しく慌てた、稟の叫びを聞いて、魔王様は顎に指を添えながら頷いた。

「まあ、八年も前のことだからねえ、忘れていても仕方がないかな」

「君達は、子供の頃に出会っているんだよ」

「えっ・・・出会って・・・？」

「そう、その時から君への淡い恋心をその小さな胸に秘めて・・・」

「あ、ネリネちゃんのバストサイズは問題ないから、安心してくれたまえ」

「その思いを今まで絶えることなく抱き続けてきたのだよ」

「おいまー坊！うちのシアもネリッ子のふくれまんじゅうほどじゃないが、小さくはねえぞ！」

「今は成長途中、これからでかくならあ！」

バキ！！

神王様の顔が真横にズれる。

「お父さん、お願いだから恥ずかしいことはしないで」

少女は、先程の椅子を手にしていて、椅子には血が付着している。

「もうリンちゃんも真っ赤になって固まってるじゃない」

「・・・」

「いや、稟殿にしっかり売り込みをしないと・・・」

「お父さんはしないで結構です」

「はい・・・」

娘に、廊下へと追いやられる両王。

「まあ、詳しいことは二人に聞くなり、思い出すなりしてくれたまえ」

「それでは、稟ちゃん二人をよろしく頼んだよ」

「おう、よろしくな」

二人は俺の方に振り返り、それだけ言うと出て行った。

コツコツコツコツ

ホームルーム中で、誰もいない廊下に響く二つの足音。

「・・・どうだい神ちゃん、・・・彼は？」

「ああ、気に入った！特にあの眼がな」

魔王の問い掛けに、神王はスッキリしたような笑顔を浮かべ。

「シアが稟殿に会ったのは八年も前のことだろ」

「だから、現在の稟殿を見るまで、少し不安だったんだがな」

神王は頬を掻きながら苦笑を洩らした。

「でも、シアやまー坊の言う通り稟殿なら信頼できるぜ」

そう言うと神王は豪快に笑い出した。

「稟ちゃんの眼は不思議な輝きをしているからね、神ちゃんも彼を一目見れば気に入ると思っていたよ」

魔王も嬉しそうな笑顔を浮かべている。

「まあ、後は稟ちゃんがどちらを選ぶかだけだね、その辺は二人に頑張ってもらおう事にしよう」

「だな！じゃあ帰って早速今夜の準備でもしますか！」

「ふむ、そうしよう」

二人はそれだけ話すと、豪快に笑いながら消えて行った。

――
――
――

1 限目終了と同時に、大勢の男子が待つてましたとばかりに、二人の転校生の元へと駆け寄っていく。

「一万年と二千年前から愛していました！！！！」

そして、その先陣を切る馬鹿が一匹。

「・・・麻弓、あいつを止めなくていいのか？」

「無理でしょ、目の前にニンジンぶら下げられた馬状態だもん」

「まるで、イノシシみたいだな・・・」

麻弓と話していると、クラスの男子が数人近付いて来て。

「おい、土見ちょっと付き合え」

「ちょっと、今土見君は私と話してるのよ！」

「うるさい、タイムは黙ってる」

そいつらは、制止をかけた麻弓を睨み付けて黙らせ。

稟を囲み無理矢理にトイレへと連れ出した。

トイレの前に来たら二人の生徒が入口に残り、残りは稟を連れてトイレに入っていた。

入口に残った二人は、他の生徒が入ってこれないように、教師が来たらすぐに対応できるようにするためのようだ。

誰かが入口に残るように指示を出さなくても、自分達で動くあたり手馴れた物である。

ガン！

「グッ！」

トイレの中に入ったクラスメイトは、中に入るなり稟の襟首を掴み壁に叩き付けた。

「おい、土見！お前あの二人とどういう関係なんだよ！」

数人で囲み詰問を始める。

関係も何も、二人の父親から説明があったのに、それを理解できないクラスメイト。

「なんで、お前みたいな人殺しが、あの二人の婚約者候補なんだよ！」

「テメエは！楓ちゃんの母親を殺したんだろうが！」

男子達から浴びせられる罵声の嵐。

そんな、罵声にも稟は、ただ黙つたまま耐えている。

「そんな、人殺しのお前が、婚約者候補なんておかしいぜ？」

「お前・・・何を考えてるんだよ？」

男子達から、集まる疑惑の視線。

稟はその視線をも、無表情なまま真正面から見据える。

全てが、自分に対する罪、だから反論も抵抗もせずに、全て受け止める。

「馬鹿、こいつの考えてる事なんか決まってるだろ、次期神王か魔王だぜ」

「最低のクズ野郎だな！」

そつ吐き捨てた男子は、大きく拳を振りかぶり、その拳を稟に叩きつけた。

「ぐうつ!!！」

ガツン！という鈍い音が、狭いトイレの中に響く。

殴られた稟の口からは血が流れている。

「お前みたいなクズに、あの二人から好かれる資格なんかないぜ！」

「お前本当に最低だなー！」

そう叫びながら、自分達の行いこそ最低な事とは気が付かずに次々に殴り付けて来る男子達。

最初の一人以外は全員がお腹を殴って来る。

お腹なら服に隠れているため、目立たず教師に気付かれる事が無い。

その為、いじめ等ではよく殴られたりする部分だが、

お腹を殴られるのは、顔を殴られるより痛く身体に応える部分なのだ。

顔なら頭蓋骨で守られているが、お腹は守る物などなく直接内側にダメージが響く。

痛く無い訳が無いのに、稟は表情を変えずに、歯を食いしばり堪えている。

「あの二人に何かしたら、どうなるか覚えとけよ！」

キンコーン♪

廊下に鳴り響く始業の音。

その音を聞いた男子達は、それだけを言い残して、トイレから出ていった。

「……資格がない事ぐらい……わかってるさ……。」

立っているのが辛いのか、壁に寄りかかりながら、鏡に映る自分に向かってそう吐き捨てた。

1
昼休み

Side
楓

一時間目の休み時間に、男子達に連れられて、何処かに行っていた彼は、次の授業中に頬を赤く腫して帰つて来た。

何でだろう、あの人から目が離せない……。

婚約者？あの人は人殺しなのに、なんであの人に？

何故？何故？何故？何故？何故？

わからない・・・、凄くイライラする。

「楓どうしたの？」

気が付けば目の前に、紗織の顔があった。

自分で気がつかないうちに、私はあの人をボーッと見ていたみたいだ。

「あつ、
紗織……」

「お昼行かないの？」

紗織は首を傾げ、少し心配した顔で、私の顔を覗きこんむ。

「あ、はい行きますよ」

そんな紗織を安心させるために、彼の存在を意識の中から消し去り、笑顔を浮かべて返事を返した。

「そう？じゃあ屋上行いよう」

そんな私に、紗織も笑顔で頷いて。

私達は屋上に向かった。

昼休みになり、購買にパンでも買いに行こうと、扉に手を置き所で。

「稟ちよつといいかい？」

樹から声が掛かった。

「稟、今から昼飯に行く所かい？」

「そうだけど・・・？」

「そうか、そうか」

時間が経てば、欲しいパンは無くなってしまうのに、樹はもったいぶるように、一人頷いて。

「稟、シアちゃんとリンちゃんと一緒に屋上で昼飯を食わないか？」

「いいけど、パンを買ってくるから、先に行つてくれ」

樹は、稟の返事を聞くと不敵な笑顔を浮かべ。

『いや、その必要は無い、シアちゃんが稟に弁当を作つて来ているから!!』

樹の、でかいその台詞は学校中に響き。

『なっ！何〜〜！！！！』

樹のその台詞に、学校中の男子から雄叫びが上がった。

ネリネとシアと弁当と（前書き）

神様どうか、お願いします、文才を文才を下さい p、
、 q

ネリネとシアと弁当と

「やっと、稟くんと話せます」

「そうですね、こうして稟さまと、話せるまでの時間が、凄く長く感じます」

二人は目をキラキラさせながら、はしゃいでいる。

昼飯を食べに、屋上に上がって来た稟達は、シアが持って来た弁当を中心に腰を下ろし。

そして、その周りには、飢えた獣の眼をした男子が稟達を囲んでいる。

「でも二人ともよかったの？『キヤア〜！稟くん会いたかった〜！』とかいって抱き付いたりしなくて？」

「土見君に会う為の転校なんですよ？」

麻弓は、大袈裟なりアクションで、稟に抱き付く真似をした。

その言葉に、シアはネリネと顔を見合わせると、照れたように舌を出して。

「あの……、本当はですね、すつつつごくやりたかったんですけど……」

「大勢の皆さんの前でそれをしてしまうと、稟さまにご迷惑が掛か

ってしまうので・・・」

二人は同じように、顔を赤らめ、上目遣いで物欲しそうな視線を向けてくる。

「うつ・・・」

そんな二人の物欲しそうな視線に動揺していると、ポンと肩を叩かれ、そっちを向くと満面の笑みを浮かべた樹の顔があった。

「稟」

「・・・なんだ？」

「殴っていいかい？電離層まで届くほど空高く!!」

樹の台詞に周りにいる男子全員が頷く。

「だっ・・・だめだ」

その笑顔はやめろ、恐怖しかないから。

で、できるのですよ・・・

自らの本心を抑えてまでも、相手を立てようと尽くす女・・・。

くっ、ライバルは手強いのですよ！頑張らないと！

「えっと・・・、それより何で弁当を？」

稟の目の前には、定番のタコさんウィンナーや唐揚げ、ハートマークの入った弁当が置かれている。

先程から稟は、その弁当を凝視しているばかりで手を付けていない。

「昨日会った時、稟くんいつもスーパーのお弁当だって言ってたから」

「稟くん、八年前の夜にも晩御飯にパンを食べてて」

「一緒に遊び疲れてお腹空いてた私に、『俺はお腹いっぱいだからあげるよ』って言って、私にくれたの、そのお返しにと思って・・・駄目だったかな・・・？」

その言葉を聞いた稟は弁当箱を掴むと、周りの目を気にせず食べ始めた。

「えっと・・・、凄く美味しいよ・・・ありがとう」

「えへへ、うん！」

稟の少し照れた言葉に、シアは満面の笑顔を浮かべ、稟が照れながら弁当を食べる姿を嬉しそうに見つめた。

「うう・・・、私も料理が作ればよかったのですが・・・」

「うう、私も作れるのならよかったのですよ」

（これから料理の勉強しよう）

弁当を食べる稟と、嬉しそうにしているシアを見て
弁当を作れないネリネと麻弓は、料理を勉強する決意をするのだっ
た。

「でも・・・こうして稟君と喋っていると、やっと人間界に来たん
だなって、実感が湧いてきました」

「そうですね、今までは稟さまに会いたくも会えなかったから、こ
うして話しができるなんて感激です」

二人は稟と話せる事ができる喜びを、噛み締めるように目を閉じて
微笑んだ。

「そういえば、二人は幼い頃に土見君と出会っているのですよね？」

「はい、八年前に一度だけ。お父さんの仕事の関係でこっちの世界
に来てたんですけど・・・やっぱり退屈で」

「電車に乗って逃げ出したのはいいんだけど、迷子になってしまっ
て・・・」

「またチャレンジャーなことを・・・」

麻弓の少し呆れたような言葉に、シアはアハハッと苦笑いを浮かべ
て。

「やっぱり、本で見たっただけで電車を使ったのが敗因かなあ、駅

名も何も分からなかったし」

「それでこの街に辿り着いて、途方に暮れていた所を稟君が話し掛けてくれた」

「大人の人たちに発見してもらえるまで、遊んでたんです」

そこまで話すと、シアは、思い出してくれた？

と尋ねるように、稟の顔を笑顔で見つめてきた。

「私も、シアちゃんと同じです」

「お父様の付き添いで、この人間界に来て、そのままはぐれてしまつて・・・」

「気がついたら、この街にいて、そこで稟さまに出会って一緒に遊んでいたんです」

そして、ネリネもシアと同じく、思い出してくれた？

と尋ねるように笑顔を向けてくる。

八年前？・・・ああ・・・そうか。

あの頃はもう、俺は独りだったから。

同じように一人で寂しそうにしていた、変った娘と遊んだんだっただけだ。

「稟、キミはいつ源氏物語計画なんて高度な技を身につけたんだい？俺様も誘ってくれよ、ズルイじゃないか！」

樹は心底悔しそうな表情をしようと、周りにいる男子全員が樹の言葉に頷いた。

中には血の悔し涙まで流している男子もいる。

「そんな技を身につけた覚えはない」

「つまりは無意識に、っと・・・、これは連絡する必要があるのですよ・・・」

そう呟くと、麻弓は携帯を取り出し何処にメールを送信した。

S i d e
楓

八年前、お母さんが死んだ頃。

「ねえ楓、八年前って確かあの事件があった頃よね？」

「楓が一番苦しんでる時に、その原因のあいつは呑気に遊んでたなんて・・・、本当に最低な奴・・・」

紗織はあの頃の私の姿を知っているから、そんなあの人が許せないのだろう。

S i d e o u t <

「なあ？今の話して本当にあの土見なのか？」

「違うだろ、だってあいつは人殺しなんだし」

「だよな・・・」

二人との出会いを思い出していると、周りにいる生徒からそんな呟きが洩れてきた。

幸いにも、その言葉自体は小さかった為に、シアとネリネの耳には届かなかったが、
稟には、はつきりと聞こえてきて。

声が聞こえて来た方に目を向けると、生徒達の中には楓の姿もあった。

楓・・・屋上に出て来てたのか・・・。

楓の姿を見た稟は、小さく頭を振り、
小声で『二人ともごめん・・・』と呟き顔を上げて、シアとネリネの眼を見つめて話し始めた。

「8年前二人と一緒に遊んだのは、俺じゃない」

『えっ！』

稟の言葉に驚く二人。

「俺は、8年前道に迷っている女の子に、声をかけたりなんてして
いない」

「二人と一緒に遊んだのは、俺じゃなくて他の誰かだ」

嘘を吐いている自分を自嘲するみたいに口元を歪め、二人に言い切
った。

稟の独白に、周りでコソコソと喋っていた生徒も、口を閉じ稟の言
葉に耳を傾ける。

「そっ！そんなことない！だって・・・あの時確かに稟くんに助け
てもらったんだよ！」

「そうです！あの時稟さまが、自身で土見稟って名乗ったんです！」

『だから！人違いな訳ないんです！』

二人は驚きで眼を見開き、身を乗り出して稟の言葉を否定する。

「いや・・・俺じゃない、そもそも8年も前の出来事だろ？二人と
も勘違いをしてるんじゃないか？」

「違っ！」「それに・・・8年前の俺がそんな事するはずない・・・」
もう一度だけチラッと楓を見て。

「俺は・・・8年前に人を殺しているんだから・・・」

そして・・・またいつものように二人にも同じ嘘を吐く。

「えっ？」

「俺は人殺しなんです、二人が探してる人間じゃない・・・」

「だから・・・俺には近づかないで下さい」

二人の言葉を完全に否定し、屋上を去る。

『稟くん（さま）・・・』

二人は、辛そうな表情で、扉の向こうに消えていった、背中を見つめていた。

稟が去った後、周りにいた生徒は8年前の事件の事、楓の事、如何に稟が酷い事をしたかを二人に教え出して。

「・・・」

そんな、生徒達の姿を遠くから悔しそうに、麻弓と樹は何も言わずにジッと見つめていた。

――
――
――
屋上の扉を閉めた稟は、そのまま走り出し。

唇を強く噛み、何回も何回も『ごめん……』と呟きながら廊下の奥に消えて行った。

稟と紅女史と進路希望と（前書き）

2日振りの投稿です（<|>）

1日一回更新したいですが、なかなか難しいものですねp（、q）

時間があればいいんですが（p|;）

今回は少し短いですが、切りが良かったのでここまでです。

感想やアドバイスを是非よろしく願いますm（| |）m

稟と紅女史と進路希望と

「今日のホームルームはこまで」

紅女史のホームルーム終了の合図で、今日1日の工程が全て終わり。それと同時に、生徒達は部活や遊び、帰ったりと思い思いに動き始める。

そんな中、シアとネリネはいち早く動き出し、稟に話しかけようとした。

昼休みの事件以降も、シアとネリネは休み時間毎に、稟に話しかけようとしていたが。

周りの生徒が押し寄せてきて、気が付けば稟はクラスから居なくて、授業開始直前まで戻ってくることはなく。

結局今まで、話したくても話す事が出来ずにいた。

だから二人は、もう一度話しをするために、ホームルーム終了のタイミングを見計らっていたのだ。

「稟く（稟さ）つつちー、ちょっといいか？」

二人が話しかけた瞬間、先に紅女史が稟に話しかけてしまう。

「つつちー、話があるから、進路指導室まで来てくれるか？」

稟は話しかけようとしていた、シアとネリネに気付いていて、二人をチラッと見ると。

『あつ………』

二人は悲しそうな顔をしていたが、稟は紅女史に了承の返事を返して。

教室を出て行った、紅女史の後を付いて出て行ってしまった。

昼休みの事から、稟にら避けられている、その事にショックを受けて立ち尽くす二人。

「リンちゃん、シアちゃん、話しがあるんだけどちょっといいかい？」

そんな二人に、樹が話し掛けた。

『あつ……はい、いいですけど』

「ここじゃなんだから屋上に行かないかい？麻弓も一緒に行くよな？」

「うん、オッケーなのですよ」

了承をもらった樹は、話す場所を屋上にし、更に麻弓を誘う。

麻弓も樹が何の話しをするのか分かっているらしく、普段なら樹をからかう所だけれど、素直に返事を返した。

『はい、大丈夫です。』

今までの休み時間とは違う樹の雰囲気を感じ取ったのか、二人も真剣に返事をし、4人は屋上に向かった。

「あの・・・それで緑葉さま話しとは・・・？」

「うん、それはね昼休みに稟の過去を聞いて、今二人が稟の事をどう思っているか・・・」

「それが聞きたいんだ」

Side 楓

「失礼しました」

一礼をして職員室を後にする楓。

楓は今日の日直で、日誌を職員室まで届けにきていて。

その帰りに進路指導

室の前を通り過ぎようとした時、紅女史の声の中から聞こえてきた。

「でもな、つつちー、お前は成績いいんだから、大学に行った方が

いいんだぞ」

「働くのは大学を出てからでも遅くはないだろ？」

稟の進路の事について、心配した声色で説得している紅女史。

稟の名前が出てきた瞬間、楓は進路指導室の壁に張り付いて、聞き耳をたてる。

「でも、これ以上は、おじさんに迷惑をかけられないです」

「只でさえ、今までの学費は、全額出してくれているんですから」

「早く働き始めて、お金を返していかないと」

稟は両親の遺産から学費を出すように、楓の父親に提案したが、幹夫はそれを拒否して稟の学費は幹夫自身が出している

幹夫は、楓を救ってくれた、今なお救い続けてくれている稟に恩を感じていると同時に、自分は何も出来ずに、稟に全て背負わせてしまった罪の意識を持っているためそれぐらいはしないと気が済まないのである。

「芙蓉さんはこの前、つつちーを大学に行かせたいと言っていたんだが？」

「奨学金も出るし、お金を返すのは大学を出てからでも遅くないんじゃないか？」

学歴社会の日本では、高卒は何かと不利になるため、自分の生徒で

ある稟には苦勞をして欲しくない、
紅女史はそう思っているからこそ、根気よく説得を続ける。

「いえ、俺はずっと前から決めていたんです、高校卒業したら独り立ちするって」

「だから大学には行かないです」

頑なに大学に上がる事を、拒否する稟。

今まで楓はモテるのに、浮ついた話し一つ出てこない。

その原因が自分にある事は理解している、楓は稟を憎むと言う感情が、一番優先順位が高く、他はその後になっている。

だから自分が芙蓉家を去れば、憎むと言う感情以外の優先順位が高くなり、

《楓の前から逃げ出した自分》は憎まれたまま嘘がバレる可能性も下がる。

そして、小さい頃に交わした約束は稟が一方的に破ったという事になる、

それで稟は働くという考えに至った。

「はあ……、分かったよつつちー、後一年あるんだ、だからゆっくり考えよう」

「一年考えてみて、気持ちが変わらないなら、私も就職活動に協力する、それでいいか？」

あまりにも頑な稟に、溜め息を吐いて

（今回も説得に成功しなかったな）

と、紅女史が先に折れてしまった。

「・・・・・・・・分りました」

「よし、なら話しは終わりだ、帰っていいぞ」

話しが終わり扉に向かう稟。

今まで盗み聞きしていた楓は急いで柱の影に隠れ。

楓が隠れたと同時に、扉が開き稟が出て来て廊下を去って行った。

ふう・・・・・・・・、と楓は安堵の溜め息を吐き、今聞いた事を考えながら、稟が帰って行った方を見つめていた。

ブランコと稟君と幼なじみと（前書き）

だんだん話しが短くなってるよ（T―T）

時間が時間が欲しい、続きを書く時間が欲しいp（、、q）

とりあえず、続きを書きましたので短いですがどうぞ。＼（ハ―ハ）
／

ブランコと稟君と幼なじみと

いつもの公園、そこに学校を出た後、弁当を買ってやって来た稟だが、

弁当を食べずにブランコに座り、ユラユラと揺らしながらボーと今日の事を考えている。

シアとネリネが転校して来た事、婚約者候補の事、そして昼二人に嘘を付いて傷つけた事。

稟は小さい時に遊んだ時の、シアとネリネの顔を白黒の写真を見る感じで、思い出していた。

昼休みの二人の辛そうな顔を思い出し、買ってきた弁当に手がつかない。

「どうしたの稟君？辛そうな顔して？」

ブランコに乗り俯いていたら、稟を心配した声がかかる。

「桜……」

顔を上げてみると、もう一人の大事な幼なじみの八重桜が、心配した顔でこちらを覗いていた。

「昼休みに麻弓ちゃんから《土見君に婚約者候補現る》っていうメールが来たから、稟君に話しが聞きたくて、会いにきたんだけど……」

「稟君の辛そうな顔見たらさ……全部分かつちゃったよ」

桜は他の誰も見分けることができない、辛そうな表情をした稟の背後に周り、背中からぎっと抱き締め。

「稟君は……相変わらず不器用だね」

小さくなって消えてしまいそうな稟が、消えてしまわないように、強く強く抱きしめた。

桜は小さい頃から勘がよく、周りの空気を読むのが得意だったが、

稟の事に関しては、何よりも敏感に感じ取ることができる。

桜は小学校、中学校と、友達が居なく、周りから恨まれ拒絶されてきた稟の側で、唯一ずっと今まで支え続けてきた。

そうして、長年稟の側にいた桜は、誰よりも稟の表情を読む事ができるようになっていて。

今回の事も、稟の顔を見ただけで、稟が二人を遠ざけた事やその理由まで、全て分かってしまったのだ。

「ごめんな……桜心配かけて」

「それとありがとうな……、だいぶ落ち着いたよ」

背後から抱き締められて数分、落ち着いてきた稟は、恥ずかしそうにそうにしている。

背中に、桜の大きな2つの膨らみが当たっているため、稟は無表情のままなのに顔が赤く変わっていた。

「いえいえ、稟君が元気出たならいいよ」

桜はニコツと笑い、稟の横のブランコに腰を下ろした。

「それで稟君、何で突然婚約者候補になっちゃったの？」

そして、聞かれる今日の出来事。

Side
桜

「そつか、じゃあその二人は私のライバルなんだね」

知らない場所で困ってる所を、助けて貰って、親が探しに来てくれるまで、ずっと側にいてくれた……。

そんな、稟君の何気ない優しさに触れて、好きになっちゃったなら仕方ないかな。

「いや桜俺は……」

稟君が私の言葉を否定しようとしているけど。

「うっん、私は前に告白したみたいに、まだ稟君の事が好きのままだよ」

私は自分の気持ちを伝える。

私はもう稟君が好きって開き直ってるんだから止まらないよ？

それにあんな理由で告白を断られても。

そんな理由じゃ・・・、稟君を・・・好きな人を手放せないよ・・・。

「稟君が私達の為に全て背負い込むなら、私は勝手に稟君の側に居続けて、稟君を勝手に支え続けるんだから」

「私はもう決めたんだよ、絶対稟君は幸せにするって!」

そう言って私は稟君に微笑みかけて。

「私が頑固なの知ってるよね？だから覚悟しててね稟君」

私は、稟君にそう宣言したのだ。

フランコと稟君と幼なじみと（後書き）

今回は私的には好きな話でしたね、何せ桜さん登場ですから！（b^ー。）

何せ初めてリアリアやった時に、何故本編に桜を出さなかったNa ve1!!桜シナリオ作れよ!!（；、皿、）

と思わず叫んでしまいましたから（、ー、）

あと亜麻さんと紅女史の、ちよめちよめがあったのはメガツサ良かったデス（o^ ^o）

ということで、私の小説では桜はキーパーソンです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7279o/>

SHUFFLE！！ ～笑顔を忘れた貴方へ～

2010年11月26日15時31分発行